

# 堂崎天主堂の世界遺産候補除外とスケールの政治

大平 晃久（国際文化講座教員）

## I はじめに

現在、世界遺産は広く注目を集めている。日本はユネスコの世界遺産条約（「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」、1972年採択、1975年発効）を1992年に締結し、それ以降、2016年までの日本の世界遺産登録数は文化遺産が16、自然遺産が4に上る<sup>1)</sup>。今後の世界遺産登録をめざす動きもいくつかあり、そのうち、主に長崎県内のキリスト教関連遺産は2007年1月に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産暫定リストに記載され、2015年1月に正式推薦されたものの推薦書の取り下げに至り、今後、2018年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として再推薦が見込まれている<sup>2)</sup>。

世界遺産については、保全管理の技術的な問題や観光など経済的な問題だけでなく、遺産の意味づけの変質やナショナリズム、エスニシティとのかかわりなど、様々な社会的・文化政治的な問題が考察されてきた<sup>3)</sup>。こうした研究は世界遺産に限らず様々な文化遺産に共通するものでもある。長崎のキリスト教関連遺産についても、松井圭介らによって、人文地理学と宗教学の双方から宗教とツーリズムの関係に着目した研究が進められてきた<sup>4)</sup>。

本稿は、長崎県五島市ごとうに所在する堂崎天主堂どうざきに注目する。堂崎天主堂は1908年に完成した赤レンガ造ゴシック様式の教会堂で（図2）、1968年以降は教会としての機能の大半が近隣の浦頭教会堂うらがしらに移され、堂崎天主堂の内部にはキリシタン資料館が開設された。また、堂崎天主堂は1974年に「堂崎教会」として長崎県指定文化財になっている。ただし、この堂崎天主堂は世界遺産登録をめざすキリスト教関連遺産の構成資産候補ではない。世界遺産登録運動の開始当初から有力な構成資産候補であつたものの、候補から除外されるに至ったという経緯をもつ。

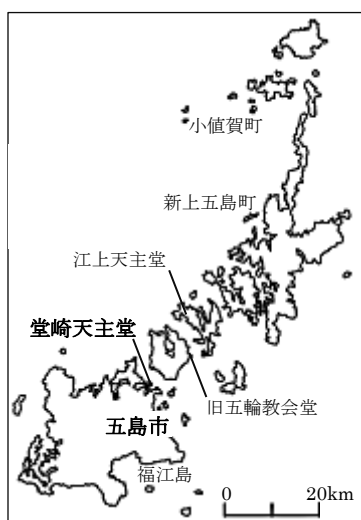


図1 堂崎天主堂の位置

あつたものの、候補から除外されるに至ったという経緯をもつ。

本稿では、世界遺産登録運動のなかで堂崎天主堂をめぐる、どのような施策や言説があつたかを検討することによって、広く文化遺産に共通する遺産と地域との関係、とくに文化の政治に関わる問題を考えることを目的としている。以下では、まず堂崎天主堂をめぐる世界遺産登録運動の経緯を明らかにし（II章）、そのうえで、そこにみられる文化政治的な問題、特にスケールの政治に関する問題を指摘する（III章）。

## II 堂崎天主堂世界遺産登録運動の経緯

(1) 暫定リスト登録まで 長崎におけるキリスト教関連遺産の世界遺産登録運動は2001年9月に発足した「長崎の教会群を世界遺産にする会」によって始められたといえる<sup>5)</sup>。この会の会長の林一馬長崎総合科学大教授（当時）はのちに長崎県世界



図2 堂崎天主堂

遺産学術会議の委員長を務めており、この会の役割の大きさがそこからもうかがえる。

「長崎の教会群を世界遺産にする会」は五島でも活動しているが、当初は少なくとも行政からは世界遺産登録の期待は高くなかったようである。すなわち、2002年には五島列島の教会群の巡礼ツアーである「秋の五島列島 church week」が五島観光連盟主催、「長崎の教会群を世界遺産にする会」協力で開催され<sup>6)</sup>、2005年には講演会と見学会からなる『世界遺産への道ながさきの教会群』in 五島が「長崎の教会群

を世界遺産にする会」ほかを主催として開催されている<sup>7)</sup>。しかし、例えば2006年5月の五島市議会では、世界遺産に向けた取り組みについての議員の質問に対して、「県や長崎市、また新上五島町<sup>しんかみごとうちょう</sup>でも具体的な活動は行われていない。…今後は、文化財の保護に力を入れながら関係団体と連携を取り、協力していきたい」という非常に消極的な答弁がみられる<sup>8)</sup>。世界遺産は現実味をもっては受け止められていなかったことがうかがえる。

堂崎天主堂は「長崎の教会群を世界遺産にする会」による世界遺産候補に当初から含まれていた。同会の冊子では長崎県内外の49の教会が候補としてリストアップされ<sup>9)</sup>、表1に示したように、上下五島<sup>おち・かちよう</sup>（小値賀町を含む）では19もの教会堂があげられている。また、同会の活動を報じる『西日本新聞』の記事（2002年4月）には堂崎天主堂の写真が用いられ<sup>10)</sup>、さらに『長崎新聞』の連載記事「世界遺産への旅」（2007年4月～12月、全17回）の第1回・第2回が堂崎天主堂であったことは特筆されよう。

そもそも、堂崎天主堂は歴史的にみて五島の中心のカトリック教会であり、建築学的にも一定の評価を受けてきた。堂崎天主堂は「五島キリシタン復活の拠点として、まさに五島における小ヴァチカン的な重責を果たしてきた。長く厳しい弾圧<sup>（むづ）</sup>を絶え抜いた五島キリシタン受難と勝利のシンボルである」<sup>11)</sup>、あるいは「堂崎の浜辺で五島初のクリスマスミサが捧げられました」<sup>12)</sup>とその歴史的な重要性は語られる。また建築学の立場からは、まず太田静六九州大教授（当時）によって「わが国初期煉瓦造りの教会堂として、建築史上及びわが国の切支丹の研究に貴重な存在」と評され<sup>13)</sup>、長崎県内のカトリック教会堂の価値をランク付けした『長崎県のカトリック教会（長崎県文化財調査報告書29）』（1977年）では、堂崎天主堂は現五島市内の教会堂で唯一「A」評価が付けられている<sup>14)</sup>。

(2) 構成資産候補入り、そして除外 文化庁は2006年度と2007年度に世界遺産暫定リストに載せる国内候補を自治体から公募し、長崎県は2006年度に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を応募（提案）し、2007年1月23日に国内候補に決定、同年6月27日記載が確定した。この「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は20の構成資産候補からなるシリアル・ノミネーションで、堂崎天主堂のほか、五島市内の教会堂では江上天主堂、旧五輪<sup>えがみ</sup>教会堂<sup>ごりん</sup>が含まれていた。なお、その後の検討の過程で構成資産候補は増加し、2008年11月30日の第4回長崎県世界遺産学術会議の時点では最大の43候補にまでなっていた<sup>15)</sup>。

こうした状況に対して、五島市では2008年1月29日に市世界遺産登録推進本部が立ち上がると

表1 上下五島におけるキリスト教関連遺産の世界遺産構成資産候補変遷

「長崎の教会群を世界遺産にする会」提案（2003年）	暫定リスト登録（2007年）	候補数最大時（2008年）	正式推薦（2015年）
堂崎教会	堂崎教会	堂崎教会（五島市）	
楠原教会（五島市）			
嵯峨島教会（五島市）			
半泊教会（五島市）			
貝津教会（五島市）			
浜脇教会（五島市）			
水の浦教会（五島市）			
旧五輪教会	旧五輪教会堂	旧五輪教会堂	旧五輪教会堂（五島市） (ノ)
		下五島の文化的景観	
江上教会	江上教会	江上天主堂	江上天主堂（五島市）
青砂ヶ浦教会	青砂ヶ浦天主堂	青砂ヶ浦天主堂 （新上五島町）	
頭ヶ島教会	頭ヶ島天主堂	頭ヶ島天主堂	頭ヶ島天主堂（新上五島町） (ノ)
		上五島の文化的景観	
大曾教会		大曾教会（新上五島町）	
江袋教会（新上五島町）			
旧鯛ノ浦教会（新上五島町）			
冷水教会（新上五島町）			
福見教会（新上五島町）			
土井ヶ浦教会（新上五島町）			
中ノ浦教会（新上五島町）			
		野崎島の旧農村集落	野崎島の野首・舟森集落跡 ノ（小値賀町） (ノ)
旧野首教会	旧野首教会	旧野首教会	
		小値賀の文化的景観	

（注）小値賀町を含む。

ともに<sup>16)</sup>、県教育委員会などの主催で世界遺産に関するシンポジウムが開催されている（2008年2月17日）<sup>17)</sup>。また2009年度からは教会群への訪問者に対応するための巡礼センターが福江空港に開設された<sup>18)</sup>。このほか、市中心商店街に世界遺産情報センター設置も検討されたが<sup>19)</sup>、2015年現在、県が構想する世界遺産センターのサテライトとして五島観光歴史資料館を整備する方向になっている<sup>20)</sup>。

五島市はまた、世界遺産暫定リストに含まれた3教会堂について、2008年度から周辺を含めて重要文化的景観への選定を目指して動いている。福江島の岐宿や三井楽の一部まで含めた広い区域を景観計画区域に設定することが目指され<sup>21)</sup>、同時に3教会堂付近の重要文化的景観選定をめざした保存調査委員会が立ち上げられた<sup>22)</sup>。なお、この時期、堂崎天主堂についてはトイレ改修問題が話題となっている。これは天主堂近くの公衆トイレの「教会風」デザインが世界遺産にふさわしくないというもので<sup>23)</sup>、地味なデザインへの改修が行われた<sup>24)</sup>。一方、同じ五島市内の江上天主堂については地元のカトリック奈留小教区評議会が世界遺産暫定リストからの除外を求めるという動きもあった<sup>25)</sup>。

上述の通り、43にまで増えた構成資産候補について、県世界遺産学術会議では厳選する方針を示した。県世界遺産学術会議は、構成資産の選定や遺産の価値づけなどに決定的な役割を果たし、年に1～3回開催されている。6人の研究者委員で構成され、委員長は「長崎の教会群を世界遺産にする会」会長であった林一馬長崎総合科学大学教授（建築史）である。2008年8月3日の第3回会合では、林委員長から構成資産やストーリーが歴史性を重視しすぎているとの批判が出され<sup>26)</sup>、11月30日の

第4回会合で建築や景観の価値も軸に据えることが確認された<sup>27)</sup>。もともと「長崎の教会群を世界遺産にする会」の段階では純粋に建築物としての教会堂だけが対象であったのが、暫定リスト以来、キリスト教史のストーリーが加味され、そのバランスをどうすべきかが議論になったといえる。

この構成資産絞り込みの中で、2008年11月30日県世界遺産学術会議第4回会合で堂崎天主堂は国指定文化財になっていないことを理由に「保留」とされ<sup>28)</sup>、地元五島市では大きな戸惑いと反発があった。「信者として世界遺産運動の意義を何とか理解し、登録に向けて頑張ろうとしている矢先の保留。学術会議の下す評価に関して地元の信者に説明もなく、理解できないまま進んでいる。私たちの教会なのに」、「堂崎抜きに五島キリシタンの歴史を語ることはできない。受難、復活の歴史こそ世界に強い感動を与えるのに、天主堂が国指定というお墨付きを得たかどうかを基準に資産候補を評価して、そんな流れで本当に世界遺産になるのだろうか」といった声が新聞紙面(図3)に紹介されている<sup>29)</sup>。

堂崎天主堂の除外が決定するのは2011年11月6日の第10回学術会議であるが<sup>30)</sup>、五島市はそれまでの間に2つの方策で堂崎の残留を図ろうとした。1つは、堂崎天主堂の重要文化財指定を目指すというもので<sup>31)</sup>、市では国指定になれば堂崎を世界遺産に含められると考えていた<sup>32)</sup>。ただし実際には、国の重要文化財であっても青砂ヶ浦天主堂や田平天主堂のように構成資産候補から外れた事例もある。

もう一つは、重要文化的景観として構成資産入りを目指すというものであった。2015年の正式推薦書提出時点で重要文化的景観への選定を根拠に構成資産候補入りしていた地区として野首、平戸、崎津があり、堂崎もありえない選択肢ではなかったといえよう。五島市の場合、上述のように2008年度から重要文化的景観選定を目指しており、2009年3月には堂崎天主堂のある奥浦地区と、旧五輪教会堂のある久賀島を景観条例による文化的景観地区に指定する方針であることが報じられている<sup>33)</sup>。奥浦地区ではまちづくり協議会が発足(2010年9月)<sup>34)</sup>、奥浦まちづくり計画が立案されたものの(2011年3月7日)<sup>35)</sup>、それ以前に文化的景観の計画策定区域は久賀島のみに絞られ、堂崎

天主堂のある奥浦地区は外されてしまっていた<sup>36)</sup>。

(3) 除外後の動き 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は2015年1月22日に正式に推薦書が提出されたものの、イコモスによって不備が指摘されたため、推薦書は取り下げとなった。その後の検討の中で禁教期に焦点を当てるために構成資産の更なる絞り込みが行われるとともに、遺産名称は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に変更された(2016年9月)。

堂崎天主堂をはじめとした構成資産絞り込みの過程で除外された遺産



図3 堂崎天主堂「保留」を報じる『長崎新聞』特集記事  
長崎新聞 2009年1月24日付。

については、「長崎の教会とキリスト教関連の歴史文化遺産群」として構成資産と一体的な保存・継承がうたわれている<sup>37)</sup>。これは注目すべき取り組みといえようが、現在のところ実質的な動きはほとんどみられない<sup>38)</sup>。

一方、五島市では、堂崎天主堂が世界遺産の構成資産候補に残った江上天主堂と旧五輪教会堂に準ずる扱いを受けている。例えば、世界遺産のパンフレットには堂崎について「2 教会と一体的に保存・継承していきます」との文言がみえる<sup>39)</sup>。また、市による世界遺産登録推進講座の教会めぐりや草刈りボランティアでは堂崎天主堂を含む 3 教会堂が対象とされ、教会堂を擬人化したイラストも 3 教会堂分が作成されている<sup>40)</sup>。なお、堂崎天主堂の国指定文化財への昇格も引き続き目指されているという<sup>41)</sup>。

**(4) 行政や観光の文脈における堂崎天主堂の位置づけの変化** 行政や観光の文脈における世界遺産構成資産候補除外前後の堂崎教会の位置づけの変化についてまとめておきたい。まず、市勢要覧を見ると、構成資産候補だった 2011 年版では「市の自慢」の 20 項目の中に堂崎、江上、旧五輪の関連資産候補 3 教会堂のうちでは堂崎天主堂のみがあげられていたのが<sup>42)</sup>、除外後の 2015 年版では「市の自慢」24 項目に 3 教会堂の全てが含まれるようになり<sup>43)</sup>、堂崎の位置づけは相対的に低下したといえよう。なお、合併前の福江市時代の市勢要覧では堂崎天主堂の扱いは極めて大きかった<sup>44)</sup>。

次に五島市の観光パンフレットをみると、堂崎天主堂の扱いの低下がうかがえる。『長崎五島』という五島市・五島市観光協会作成のパンフレットの記載内容から 2007～11 年ごろの作成・配布と判断される版では、表紙に大きく堂崎天主堂と貝津<sup>かいづ</sup>教会堂のステンドグラスの写真が配されていた<sup>45)</sup>。それが 2012 年以降と判断される版では表紙が江上天主堂と旧五輪教会堂ほかに代わっている<sup>46)</sup>。

3 点目に、版を重ねている観光ガイド本についてみると、『るるぶ情報版』、『まっぷるマガジン』、『楽楽九州』で五島が扱われているが、いずれも堂崎天主堂の位置づけは低下している。まず JTB パブリッシング刊行の『るるぶ情報版』をみると、2009 年版では世界遺産候補として、また「ロマンティック教会リスト」の中の一つとして堂崎天主堂は扱われていた<sup>47)</sup>。しかし、2015 年版では堂崎天主堂は「福江島一周ドライブ」の中で取り上げられるに過ぎなくなっている<sup>48)</sup>。『まっぷるマガジン』、『楽楽九州』は、いずれも世界遺産構成資産候補を中心とした紹介になり、堂崎天主堂の扱いは減少している<sup>49)</sup>。

4 点目として、表 2 に 2000 年以降の主要写真集を対象に、五島市域の教会堂がどれだけのページ数を使って取り上げられているかを示した。構成資産候補の教会堂が大きな割合を占めるようになることがわかる。

### Ⅲ スケールの政治

**(1) 堂崎天主堂世界遺産登録運動とスケール** 前章では、まず、堂崎天主堂が五島におけるカトリックの中心としての歴史を有し、建築の面でも早くから注目されていたことを確認した。そして、教会群世界遺産のなかで堂崎天主堂が初期から主要な構成資産候補と考えられてきたにもかかわらず、五島市側の取り組みもむなしく、構成資産候補から除外されるに至ったことをみた。以下では、構成資産候補から除外する論理、またそれに抵抗する論理を、「スケールの政治」として読み解いていく。

スケールは一般的な用語であるが、現在の人文地理学ではそれらとはやや異なり、「特定の社会的

表2 五島市内教会堂の写真集における扱い

	堂崎	江上	旧五輪	立谷	楠原	嵯峨島	貝津	半泊	浜脇	水の浦	旧井持浦	細石流
三沢朝昭『三沢朝昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会』智書房、2000	2	3	4	2	2	2	1	2	2	2		
雑賀雄二『天主堂 光の建築』淡文社、2004	2	2	2	4	2					2	2	2
木下陽一『天主堂物語 木下陽一写真集』海鳥社、2004	3	2	3		2		2	2	2	3		
白井綾『長崎の教会』平凡社、2012	3	4	4							2		
三沢朝昭『長崎遺産 珠玉の教会 三沢朝昭遺作写真集』長崎文献社、2013		5	5									
木下陽一『長崎の教会群 木下陽一写真集』海鳥社、2013	1	5	6		1		1		1	1		

(注) 2000 年以降に刊行された多数の教会堂が取り上げられた写真集を対象に、ページ数を示した。

プロセスをととして形成される空間の単位や規模」<sup>50)</sup>の意味で用いられることがある。この場合、グローバルから身体まで、様々なレベルの地理的スケールが想定できよう。そして、スケールの政治を考えるうえで重要な視点が「スケールのジャンプ」である。これは、「一つの地理的スケールで確立された政治的要求や権力が別のスケールに拡張されること」<sup>51)</sup>であり、例えば、地域の文化資源が国指定文化財や世界遺産を目指したり、国から指定を働きかけられたりすることが該当する。

堂崎天主堂は県指定文化財であり、ここまでみたように、ローカルな価値づけは高い。ローカルスケール、リージョナルスケールにおいて価値を認められた堂崎天主堂であったが、スケールのジャンプ、すなわちグローバルスケールでの価値づけである世界遺産登録、そしてその手段としての国指定文化財化というナショナルスケールの価値づけ獲得は成らなかったといえる。これは木村至聖が紹介する福岡県田川の炭鉱遺構とよく似ている<sup>52)</sup>。田川もまたスケールのジャンプに成功せず、世界遺産の構成資産から外れることになった。田川の炭鉱遺構の価値は、ナショナルスケールでは三池炭鉱の遺構で代表しようと判断されたのである。

堂崎天主堂の世界遺産登録運動の過程を、木村が論じた田川炭鉱の事例を参考にみるなら、堂崎天主堂はローカルな価値づけが高かったためにそれに固執し、ナショナルスケールへの移行に失敗したとみることができる。すなわち、まず、地元五島市では、堂崎天主堂が世界遺産に不可欠との認識をもっていた。例えば堂崎天主堂について、市の担当者の「五島キリシタン史に欠かせない貴重な教会。島民や信者の教会への思いは深く、世界遺産のストーリー性からも構成資産からははずせない」という発言<sup>53)</sup>が新聞紙面にみえる。まさにローカルスケールで堂崎の価値を語っているのであるが、これは地元のひいき目といえなくもない。信徒復活なら大浦天主堂、場所のストーリーの劇的さからは絵踏みが行われた庄屋敷跡に教会堂が建てられた崎津、建築の秀麗さなら田平天主堂を、それぞれ、ナショナルスケールにおける教会群遺産候補中の代表例としてあげることが可能であろう。「五島キリシタン史」ではない、ナショナルスケールでの価値の提示が必要であった。

また五島市では、堂崎天主堂が構成資産保留になった後になっても、ローカルな歴史の再提示によって構成資産入りを図ろうとしている。すなわち、2008 年 11 月の県世界遺産学術会議における堂崎保留の決定後にもたれた五島市世界遺産登録推進本部の会合（2009 年 3 月 3 日）では、その対策として、五島における潜伏キリシタンの暮らしの解明を進めることが話し合われたと報じられた<sup>54)</sup>。こ

れは、建築・景観重視というその時点での県世界遺産学術会議の議論とは大きくずれているとともに、引き続きローカルスケールにとどまった議論で<sup>55)</sup>、スケールのジャンプにはつながらないものであった。

(2) 世界遺産のストーリーを越えて 地域の文化遺産がローカルからナショナルなスケールへ、そしてグローバルなスケールへと上昇、ないし収斂していくことは必ずしも賞賛すべきことではない。山本理佳は、地域の文化遺産の国家による回収、またそのように国家に従順な地域像ばかりを取り上げてきた日本の地理学研究を批判的に論じている<sup>56)</sup>。そのように考えるならば、堂崎天主堂を含め、落選した構成資産候補は、ナショナル、あるいはグローバルなスケールには移行しえなかったとはいえ、教会群や潜伏キリシタン関連遺産のストーリーに回収されない豊かな価値を持っていることを評価すべきであろう。

堂崎天主堂の場合、日本二十六聖人の一人ヨハネ五島やカクレキリシタンの存在、あるいは、堂崎天主堂のある奥浦出身で、ブラジルで日系人への宣教に従事した中村長八神父、孤児を収容する奥浦慈恵院の活動など、数多くの価値を見出すことが可能である。これらは決して意義の小さなものではなく、また、世界遺産のストーリーには回収されないかもしれないが、それらと対立するわけではない。いわば「外伝」であり、世界遺産のストーリーを豊かにするものにはなりえよう。

五島におけるキリスト教、あるいは潜伏キリシタンの歴史をたどろうとすれば、五島市内の潜伏キリシタン関連遺産の構成資産候補である旧五輪教会堂や江上天主堂だけでは不十分である。世界遺産「潜伏キリシタン関連遺産」をより芳醇なものにするためには、堂崎天主堂のような他の遺産とリンクさせていくことが必要であろう。上述したように、長崎県では世界遺産の構成資産から落選した遺産などを「長崎の教会とキリスト教関連の歴史文化遺産群」として構成資産と一体的に保存・継承するという構想をもっており、その実現が望まれる。また、五島市の観光の現状を考えるなら、旧五輪教会堂や江上天主堂はいずれも主島の福江島外に位置することもあってそう多くの観光客を見込めず、地域全体への経済的な波及効果は薄い。堂崎天主堂など福江島内の遺産の価値を提示していくことが必要だといえよう。

#### IV おわりに

本稿では、長崎県五島市に所在する堂崎天主堂が世界遺産登録運動のなかでどのような施策の対象となり、どのように表象されてきたかを検討した。そして、堂崎天主堂が世界遺産構成資産候補から除外されたのはスケールのジャンプができなかったことに理由があること、そして文化遺産と地域との関係を考えるにあたってスケールのジャンプが重大であることを指摘した。

世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録をめぐる事態はいまだ流動的であり、今後の変化も予想される。それとともに、五島市の動き、そして堂崎天主堂の扱いが、観光なども関わる中で今後どうなるか、引き続き注目していきたい。

## 注

- 1) 文化庁「文化遺産オンライン—世界遺産と無形文化遺産」[http://bunka.nii.ac.jp/special\\_content/world](http://bunka.nii.ac.jp/special_content/world) (2016年11月15日検索)。
- 2) 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」[https://www.pref.nagasaki.jp/s\\_isan/](https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/) (2016年11月15日検索)。以下、世界遺産登録候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」・「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に関する記述はこのサイトによる。なお、世界遺産候補としての名称は、途中で変更されていることもあり、本文中では「キリスト教関連遺産」と表記する。
- 3) 才津祐美子「世界遺産という「冠」の代価と住民の葛藤—「白川郷」の事例から」(岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館, 2007) 105-128頁, 黒田乃生『世界遺産白川郷—視線の先にあるもの』筑波大学出版会, 2007, 山村高淑・張天新・藤木庸介編『世界遺産と地域振興—中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 2007 など。
- 4) 松井圭介『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会, 2013, 山中弘「長崎カトリック教会群とツーリズム」哲学・思想論集(筑波大学) 33, 2007, 176-155頁, 木村勝彦「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」長崎国際大学論叢 7, 2007, 123-133頁。
- 5) 長崎の教会群を世界遺産にする会『長崎の教会群を世界遺産に』長崎の教会群を世界遺産にする会, 2003。
- 6) 「講演会, コンサートや展示会 教会群の世界遺産登録目指し 五島観光連盟 あすからイベント」西日本新聞 2002年10月24日, 24面。
- 7) NPO 木の建築フォーラムとNHK 長崎放送局も主催団体。NPO 木の建築フォーラムウェブサイト <http://www.forum.or.jp/> (2016年11月15日検索)。
- 8) 平成18年3月定例会。市議会だよりごとう7, 2006, 3頁。
- 9) 前掲5)。
- 10) 「(NEWS 追跡検証)「世界遺産に」運動始まる 信仰伝える長崎の教会群 基盤整備など課題も多く」西日本新聞 2002年4月11日, 7面。
- 11) カトリック長崎大司教区司牧企画室『長崎の教会—キリシタンの里をたずねて』カトリック長崎大司教区司牧企画室, 1989, 253頁。
- 12) 五島市世界遺産登録推進協議会『五島市教会巡りハンドブック』五島市世界遺産登録推進協議会, 2011, 14頁。
- 13) 太田静六『五島の初期教会堂と堂崎天主堂』観光資源保護財団。1974, 33頁。なお、「価値のありそうなもの」として、冷水, 野首, 堂崎, 楠原, 青砂浦, 大曾, 井持浦の各教会堂があげられている。
- 14) 長崎県教育委員会『長崎県のカトリック教会 (長崎県文化財調査報告書 29)』長崎県教育委員会, 1977。上下五島にまで広げると, 野首, 青砂ヶ浦, 江袋, 大曾, 鯛ノ浦, 頭ヶ島の各教会堂がA評価に加わる。五島市内の世界遺産構成資産候補である旧五輪教会堂, 江上天主堂はいずれもB評価。
- 15) 「構成資産絞り込み 県学術会議 「大浦天主堂」など12件盛り込む」長崎新聞 2008年12月9日, 20面。
- 16) 「五島市が推進本部設置 景観保全など本格化へ」長崎新聞 2008年1月30日, 22面。
- 17) 「五島市で世界遺産シンポ」長崎新聞 2008年2月18日, 22面。
- 18) 市議会だよりごとう21, 2009, 11頁。
- 19) 五島市議会平成21年6月定例会。市議会だよりごとう20, 2009, 10頁。
- 20) 市議会だよりごとう45, 2015, 2頁。
- 21) 市議会だよりごとう15, 2008, 5頁。
- 22) 「下五島地域文化的景観保存調査委が初会合 国選定へ手順検討 調査スケジュール報告」長崎新聞 2008年6月28日, 23面。
- 23) 「教会風トイレ「ダメ」 世界遺産登録に支障 五島市, 取り壊しも検討」読売新聞 2008年7月9日, 35面。
- 24) 市議会だよりごとう21, 2009, 9頁。
- 25) 「(世界遺産への道 課題編・教会群とキリスト教遺産(2)) 旧五輪教会堂と江上天主堂 過疎地では課題山積み」長崎新聞 2009年9月26日, 11面。
- 26) 「世界遺産登録国への提案書 県と林委員長の意見衝突 素案調整持ち越し」毎日新聞 2008年8月4日, 23面, 「(世界遺産への道5) 県世界遺産学術会議第3回会合 歴史性が建築形態か」長崎新聞 2008年8月23日, 11面。
- 27) 「建築様式にも価値 県学術会議 推薦書でアピールへ」長崎新聞 2008年11月30日, 28面。
- 28) 前掲15)。
- 29) 「(世界遺産への道⑨) 五島・堂崎教会「保留」 県学術会議の評価に波紋 歴史性踏まえ論議を深めて」長崎新聞 2009年1月24日, 17面。
- 30) 「世界遺産候補 五島・堂崎教会外れる 前提の重文指定めど立たず」読売新聞 2011年12月16日, 31面。
- 31) 「教会群と関連遺産 候補23件ほぼ確定 県世界遺産学術会議」毎日新聞 2009年2月23日, 23面。

- 32) 「堂崎教会を国指定文化財へ」毎日新聞 2009 年 9 月 5 日, 18 面。五島市議会平成 21 年 9 月定例会では「他のレンガ造り教会との比較研究が必要」との答弁が行われている。前掲 24) 7 頁。
- 33) 「五島市全域に景観条例」五島新報 2009 年 3 月 28 日, 1 面など。
- 34) 「地域の文化的景観を世界遺産のリストに 奥浦まちづくり協議会説明会」五島新報 2010 年 6 月 12 日, 4 面。
- 35) 「世界遺産で人口減止まる 行政と民間の協働によるまちづくり計画案策定 五島市奥浦まちづくり協議会」五島新報 2011 年 3 月 26 日, 4 面。
- 36) 五島市文化推進室編『五島市久賀島の文化的景観保存計画』五島市, 2011 には対象地域を狭めたことの明確な説明はなく、遅くとも 2010 年 3 月以前の文化的景観保存調査委員会で決まったものと思われる。
- 37) 「世界遺産暫定一覧表記載資産準備状況報告書」[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/isanbukai/sekaitokubetsu/3\\_01/gijishidai/pdf/shiryo\\_4\\_2\\_4.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/isanbukai/sekaitokubetsu/3_01/gijishidai/pdf/shiryo_4_2_4.pdf) (2016 年 11 月 15 日閲覧), 3 頁に「当初の 29 資産は, 「世界遺産・歴史文化遺産群(仮称)」として一体的に保存・継承することを確認」とある。また, 「歴史文化遺産群イメージ図及び地図」(第 14 回長崎県世界遺産学術会議 2014 年 7 月 30 日)  
[https://www.pref.nagasaki.jp/s\\_isan/file/20140730rekishi.pdf](https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/file/20140730rekishi.pdf) (2016 年 11 月 15 日閲覧) に「長崎の教会とキリスト教関連の歴史文化遺産群(仮称)のプランがある。
- 38) 2011 年当時の「長崎から世界遺産を。」ウェブサイトには「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」のストーリーを支える歴史遺産である次の資産についても, 大切な資産として世界遺産の構成資産と一体的に保存・継承していきます。日本二十六聖人殉教地 吉利支丹墓碑 宝亀教会 青砂ヶ浦天主堂 堂崎教会 大曾教会」との文言があったが, その後消えている。<http://archive.is/dd0HV> (2016 年 11 月 15 日閲覧)。
- 39) 五島市『五島を世界遺産の島に!』(パンフレット) 五島市, 発行年不明, また, 次の市広報。「五島を世界遺産の島に」広報ごとう 97, 2012, 17 頁。
- 40) 「五島を世界遺産の島に!」広報ごとう 102, 2013, 5 頁, 「五島を世界遺産の島に!」広報ごとう 122, 2014, 3 頁。
- 41) 野下千年(インタビュー)「(平和への祈り 12) 堂崎教会を文化財に」西日本新聞 2016 年 2 月 13 日, 8 面。
- 42) 五島市情報推進課編『長崎県五島市市勢要覧 2011 年版』五島市, 2011, 8 頁。
- 43) 五島市情報推進課編『長崎県五島市市勢要覧 2015 年版』五島市, 2015, 8 頁。
- 44) 福江市企画課編『ふくえ海と人, かがやきあう海洋交流都市 1998 年福江市勢要覧』福江市, 1998。
- 45) 五島市・五島市観光協会『長崎五島』(パンフレット) 五島市・五島市観光協会, 発行年不明(2007~11 年ごろ)。
- 46) 五島市・五島市観光協会『長崎五島』(パンフレット) 五島市・五島市観光協会, 発行年不明(2012~15 年ごろ)。
- 47) JTB パブリッシング編『るるぶ情報版九州③ 長崎'10』JTB パブリッシング, 2009。
- 48) JTB パブリッシング編『るるぶ情報版九州③ 長崎 ハウステンボス 佐世保 雲仙'16』JTB パブリッシング, 2015。
- 49) クロス編集事務所編『マッフルマガジン 長崎-雲仙・島原 佐世保・対馬・五島』昭文社, 2009, 昭文社編『まっふるマガジン 長崎-ハウステンボス 佐世保・五島』昭文社, 2015, JTB パブリッシング編『楽楽九州③長崎・ハウステンボス』JTB パブリッシング, 2008, JTB パブリッシング編『楽楽九州③長崎・ハウステンボス・五島列島』JTB パブリッシング, 2014。
- 50) 山崎孝史『政治・空間・場所-「政治の地理学」にむけて(改訂版)』ナカニシヤ出版, 2013, 124 頁。
- 51) 前掲 50) 134 頁。
- 52) 木村至聖『産業遺産の記憶と表象-「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学出版会, 2014, 227-228 頁。
- 53) 前掲 32)。
- 54) 「潜伏時代のキリシタン 当時の暮らし把握へ 五島市」長崎新聞 2009 年 3 月 4 日, 20 面。
- 55) 世界遺産構成資産候補に絞っても, 平戸の潜伏キリシタンの聖地のような遺産を超えて, ナショナルスケールにおける価値を提示することは難しい。同じ五島に所在する構成資産候補の頭ヶ島天主堂(新上五島町), 野首集落(小値賀町)は堂崎同様の西彼杵半島外海地区から再移住した元潜伏キリシタンの遺産であり, それらとの差別化も簡単ではないように思われる。
- 56) 山本理佳『近代化遺産』にみる国家と地域の関係性』古今書院, 2013, 37-59 頁。